

名取洋之助写真集 アメリカ1937



[名取洋之助写真集 アメリカ1937 下载链接1](#)

著者:名取洋之助

出版者:講談社

出版时间:1992

装帧:

isbn:9784062056892

昭和フォト・ジャーナリズムの鬼才。日本人初の『ライフ』誌契約カメラマンがとらえた1937年アメリカの素顔と底力。数多くの未発表作品を収録。

作者介绍:

東京に実業家名取和作の息子として生まれる。母方の祖父は三井財閥の大蔵頭朝吹英二。慶應義塾普通部で学ぶも、成績不良で予科に進めず、18歳でドイツに渡る。ベルリン遊学中、国立美術工芸学校のウェイヒ教授を通じてバウハウスのデザイン思想を知る。教授の地元ミュンヘンの美術工芸学校に入り、やがて教授が経営する手織物

工場のデザイナーとして働くうちに9歳上のドイツ人女性エルナ・メクレンブルク（のち妻となる）と同棲。エルナが撮った火災現場写真を洋之助が組写真にして写真週刊誌に持ち込んだところ高値で採用され、そのことが機となってベルリンの総合出版社ウルシュタイン社に認められ、ヨーロッパ最大の週刊グラフ誌の契約写真家となり、その身分のまま帰国。

戦前は1933

年に木村伊兵衛、原弘、伊奈信男、岡田桑三らとともに日本工房を設立。翌年、意見の対立により木村、原、伊奈、岡田が脱退し、日本工房は事実上解散となる。その後、太田英茂らの参加を受け、第2次日本工房を立ち上げる。1934年には、対外宣伝誌『NIPPON』を創刊。土門拳、藤本四八などの写真家、山名文夫、河野鷹思、亀倉雄策などのグラフィックデザイナーを用いつつ、従来の日本のレベルをはるかに超えた内容の誌面を提供しつづけた。

戦後は『週刊サンニュース』や岩波写真文庫の編集に携わり、辣腕を振るった。岩波写真文庫は、第1回菊池寛賞を受賞している。

一貫して西欧流の報道写真および編集を定着させようと奮闘し、組写真などを多用することにより、写真でメッセージを伝達するという方向に注力した。逆に芸術的、主観的な写真作品を「お芸術写真」と呼び、その軽蔑を隠すことはなかった。編集者としては自分の意志に基づき写真作品を強引にとりあつかう傾向が強く、歯に衣を着せない物言いとあいまって、写真家と対立することもしばしばあった。例えば、土門との確執などはその典型的な例である。

1962年に癌のため死去。享年53（満52歳）。

二度目の妻はアナリスト作家宮嶋資夫の娘。

タイのチェンマイにHIV孤児施設を開設した「バーンロイサム」代表の名取美和は娘。

目录:

[名取洋之助写真集 アメリカ1937 下载链接1](#)

标签

摄影

日本

评论

[名取洋之助写真集 アメリカ1937 下载链接1](#)

书评

[名取洋之助写真集 アメリカ1937 下载链接1](#)